

丸亀城管理室だより No. 6

令和 2 年 12 月 1 日

現場を見上げると・・・

三の丸では、現在、海抜 39m 付近（帯曲輪より 4m ほど上）の斜面を切り下げながら、のり面のモルタル吹付けと、グラウンドアンカーの打設を行っています。

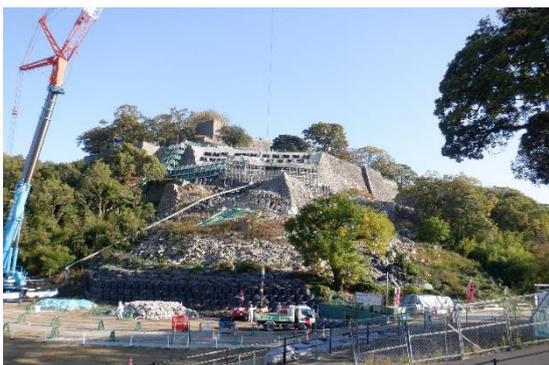
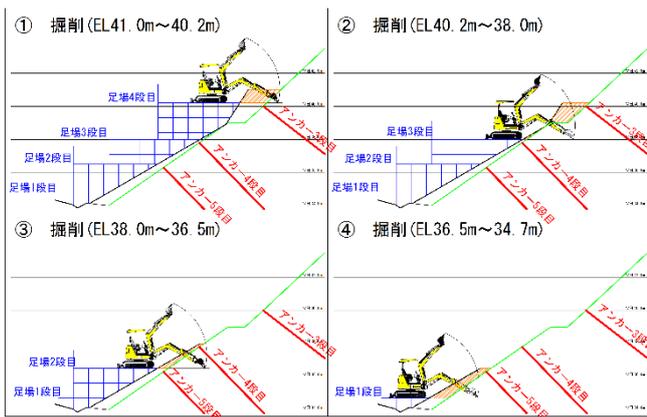
埋没石垣 1 の周辺から広範囲の栗石層が現れ、斜面上で直接作業をすることができない、狭く不安定な場所ですが、掘削用の重機や削孔用の機械の設置ステージとなる頑丈な足場が組まれています。

単管を段に組み、切り下げた斜面にあわせて足場も下がるように工夫されています。



赤の線を横から見たものが下の断面図です。
11月27日、EL39.0mまで下がっています。
重機が乗る足場は珍しいですよ。

【三の丸南面掘削用足場断面図】



【11月9日 PR館展望デッキから撮影】

「工程 10%up 活動」発進！

現在、三の丸で行っている工事・調査が当初の予定から6ヵ月遅れとなっています。

工程会議において工程 10%up 案を持ち寄り、効果が見込めるものから実施します。

埋没石垣1

PR館前に展示している埋没石垣1の下端4段目以降を10月27日に解体しました。

埋没石垣1は、今回の崩落を含めて過去に数回、災害による影響を受けていることがわかりました。また、埋没石垣1の南東端部と南西端部から**桐木（とうぎ）**※軟弱地盤で沈下が予想される現場に適用される木材、が発見されました。水掘の石垣など湿潤な場所では定番ですが、三の丸での構築は予想外でした。



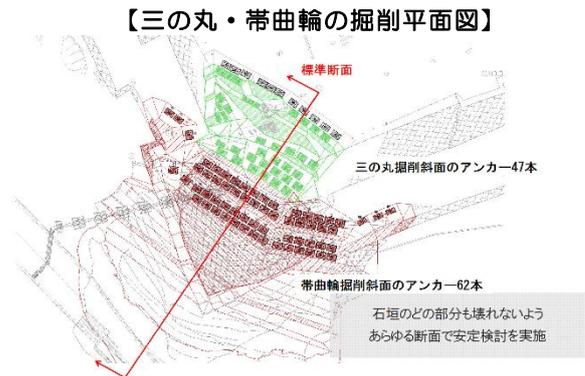
何かの理由ですれていることがわかります。

桐木は2本平行に並んでいました。

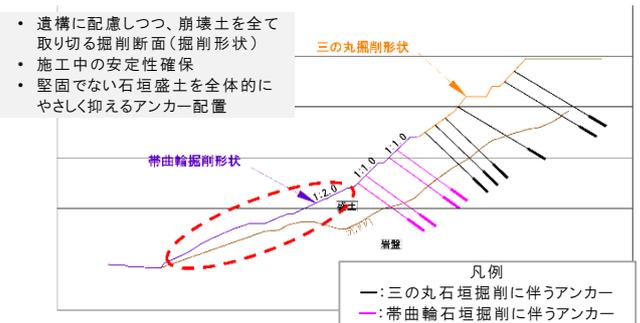


三の丸・帯曲輪の掘削平面図

三の丸斜面にある埋没石垣1・2を可能な限り原位置に残し、掘り下げるための計画平面図です。グラウンドアンカーを三の丸掘削斜面に47本、帯曲輪掘削斜面に62本、打設する計画です。



【三の丸・帯曲輪の掘削斜面・標準断面図】



丸亀城の紅葉が見ごろになりました

朝夕寒くなり、お城の木々が鮮やかに色づきました。落ち葉の上を歩いて葉音を聞いたり、どんぐりを拾ったり、みなさん思い思いに丸亀城の景色を楽しまれているようです。



【建設中の新庁舎から撮影した丸亀城】

ニッカリ青江&丸亀城石垣修復プロジェクト

ニッカリ青江は、鎌倉時代の備中青江派によって作られた刀で、丸亀藩京極家が家宝とした刃長60.3cmの脇差です。名前の由来は「にっかり笑う女の幽霊を切り捨て、翌朝確認したら石塔が真っ二つになっていた」という伝説によるものです。そんないわれをマンホール蓋にデザインしました。PR館に展示していますので、ぜひご覧ください。



【ニッカリ青江】



丸亀城への石材の運搬

土居町には「いしば」と呼ばれる地名が残っています。丁場から切り出された石は海路を利用して東汐入川から丸亀城に運ばれたと考えられています。



海から運んだ石を陸に上げ、お城に運ぶため、このあたりに置いていたそうです。

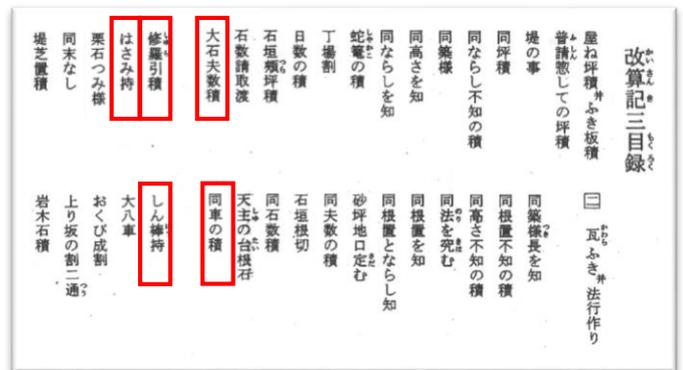


【現在の石材仮置場】

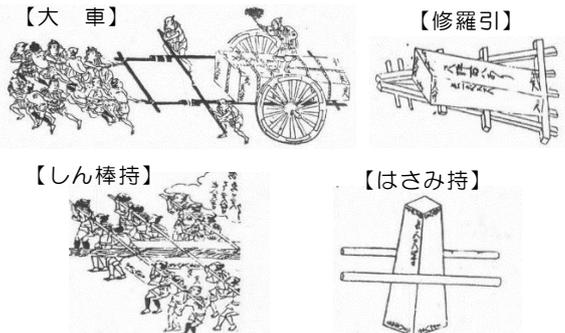
回収した崩落石材のうち、一番重たい石は1石約2トンありました。復旧工事で使用している大型クレーンは最大220トンを持ち上げることができますが、昔の人はどのように石を運んでいたのでしょうか。

★改算記(かいざんき)

市民の方が『改算記』という古い計算の本を紹介してくれました。九九や象の重さの計り方のほかに、石の運び方や石を運ぶ人数の計算式が記されています。



- 大石夫数積 = 大石を引いて運ぶ人数
- 大車の積 = 大車で石を運ぶ人数
- 修羅引積 = 修羅(しゅら)で石を運ぶ人数
- しん棒持 = しん棒で石を運ぶ人数
- はさみ持積 = はさみ持で石を運ぶ人数



江戸初期和算選書第5巻『改算記』(研成社)より

丸亀城の石垣には約6万4千個の石が使用されています。これらの石を人力で運び、それぞれの場所に適した形や大きさに加工して積み上げるには、高い技術はもちろんのこと、たくさんの時間と労力を必要としたことがうかがえます。

あらためて築城当時に思いを巡らせると、崩落石垣を復旧し、適正な維持管理を行い、「丸亀城」という財産を未来に残さなければならないと感じました。

